

挑む部だより

令和8年5月8日 No.1

挑む部では、今年度も「主体的に学び・活動する子どもの姿の実現」をねらいとして活動を進めていきます。子どもたちの力を高めるため、そして少しでも先生方の助けになるよう「挑む部だより」を発行し、情報発信することができることの1つであると考えました。今回は一般論ではなく、自分自身が子どもの頃、どのような場面で「挑む」ことができたのかを、記憶をたどりながら紹介したいと思います。

はじめに…

「最後まで読んだけどよく分からない…」

「具体例が長すぎてよく分からない…」

忙しい先生方に読んでいただいた結果、こうなってしまうのは申し訳ないので、まずは要点を紹介します。

①自らで選択する場面

②挑まざるを得ない環境

以下、具体例を紹介します。

①自分で選択判断する場面

私の世代は「ゆとり世代」と言われていますが、必ずしもゆとりがあったとは思いません。小学校在学中には様々な変化があり、印象的なのは小学6年生の時の導入された完全週休二日制と総合的な学習の時間でした。

当時、私が通っていた小学校では、3つの分野から学びたいものを選択するという方式でした。私は歴史分野を選択しました。学年で新発田に巡検に行くことは決まっていたので、テーマは「新発田」に絞られていましたが、それ以外は自由でした。

江戸時代に興味があった私は、江戸時代当時の日本の政治のトップが将軍であることは知っていました。一方で江戸時代の県知事や市長にあ



新発田市ホームページ参照

たる人物は誰なのか気がになり、新発田の代表は誰だったのかを調べました。令和の時代ほどではないですが、インターネットは既にある程度活用できる時代にはなっていましたので、歴代の新発田藩主について調べた結果、初代藩主の溝口秀勝から11代藩主溝口直正まで溝口家が代々藩主を務めていたことが分かりました。自分で調べたいと思い、決めたことは四半世紀近く経っても印象に残るということが分かりました。自らの興味関心をもとに学習を進めることができた時間は今振り返ってみても挑むことができたように感じます。

②挑まざるを得ない環境



高校入学直後から、朝テストがスタートしました。この朝テストは定期テスト直前を除き、毎日行われました。この朝テストはただのミニテストではなく、成績全体の半分以上を左右する重要なものでした。極端な話、定期テストで100点を取ったとしても、朝テストで毎回0点を取ってしまうと、当該学期の成績は50点になるという仕組みです。また、朝テストに不合格となると、放課後およそ20分~30分程度かかる不合格者課題に取り組むことになります。

朝テストの準備を怠ると、成績に直結するだけでなく、部活に参加できる時間や、下校時間が遅くなってしまいうことになります。こうなると何が何でも合格するべく努力をするしかありません。状況としては、挑まざるを得なかったという表現が近いとは思いますが、自然と毎日学習に取り組むことができました。(朝テストの結果はともかくとして…)

もちろん無条件に自ら挑むことが理想ではありますが、環境のおかげで日々の自主学習に取り組むことができたように思います。

今年度の活動について

◎主な活動

①挑む部たよりの発行⇒2か月に1回

②授業動画の公開⇒1人1回以上共有ドライブに授業動画を公開(45分のうち一部でも可)・3か月に1度学年部ごとに振り返りの場を設ける

③職員集会で普段の授業を振り返る場を設ける(月1回)

④家庭学習の取り組みについて情報共有(日常的に行う・ロイロノートを活用)

以上の4つの活動を行っていきます。まずは職員集会で活動の周知を行い、5月中に岩城による授業公開を行いたいと考えています。よろしくお願いいたします。

(挑む部 岩城 孝晴)